

「明治大正文語五十撰」を読む

横濱市ユートピア青葉「文語」作品

平成二十五年十月〜同二十六年九月

樋口一葉日記

飯田 美和子

明治二十五年二月四日の日記にて一葉は降りしきる雪の日なるも、所用忠實に、戀慕の情祕かに抱き師を訪ふ。逢へぬかもの不安と、師目覺むる時の安堵の心模様、屈託なき師の振舞ありて、切なき戀心も癒さるゝ想ひなど流麗に書きなしたる名文なり。

受講所感

飯田 隆一

文語教室にて内藤湖南の文を読む。書かれしより百年を經過せるも、なほ色褪せぬのみならず今日の新しき論評を読むが如し。

「二千年來中國道德の感化を受け、之を固有の思想と渾融して國民道德を形成したる日本の論に納得す。かかる中國尊重の上に日本の自主性を主張する論に我が意を得たりけり。」

「外科室」を読む

埋橋 勢津子

外科室を讀みて思ひ出づることあり。七月半ば家人腰の手術す。痲酔より覺めつゝありて、俄かに主治醫に呟く。「先生や皆さんに失禮なること言ひませぬか」と。「夢心地なるさまなり」と、先生苦笑ひす。

吾が眼に「外科室」の情景生々しく浮びぬ。祕密を發するを恐れ、痲酔なしにて手術に臨む、戀とはかくも凄じきものなるか。假令祕密有りとて吾にはできぬことなり。

猛暑

大野 新一

手許の未讀書籍數多となりぬるに、この世を去る迄の時間氣になるも、今は只勵むべし、その切掛けにもとて「文語教室」に入塾せり。然るにいくよりか猛暑來りて世を蓋ひ、動かさず、知力朦朧として涉らず。斯かる事の多く書き遺されざるべからずとて「文語五十撰」を開けど見えず。奥の細道を辿る程に一句「暑き日を海に入れたり最上川」これなむ猛暑消去の術

なるらむ。徒然草二百四十三段に至りて見附けたる「空よりや降りけむ、土よりや湧きけむ」、猛暑の起りを語るものと吾人の喜ぶこと限りなし。

夏目漱石の書翰を讀みて

海野 祐子

わたくしは漱石の『永日小品』などにて垣間見らるゝ家族への深き愛情をいつも微笑ましく讀みをり。英國渡航中の次第次第に日本より離るゝ寂しき風情に日本食を食納めなどと訴へる姿が偲ばるゝなり。悪妻とも評ある鏡子夫人も熊本にて精神不安定なりきと聞く。さだめてかたくなの心柄にてやあらむ、夫より妻への様々の細やかなる指圖も心安うには聞入るゝ無かりけむ。つい、「人の言ふことを善い加減に聞いてはいけません」と口語體の一行、候文の中に見出し、わたくしはおぼえずおとがひを放てり。

航西日乗を讀みて

道明 明美

文語文の講座に入りて一年餘となりぬ。今まで知らざりしこと聞き知りて驚き楽しむこと多かりき。

「航西日乗」を始めとして旅のつれづれを書き記したるものおもしろく思へり。

船からの眺め、訪れ先にての見聞、旺盛なる興味もて敘述せる文の數々、鎖國より解き放たれたる力強さを覺ゆるものなり。

講座にて學びしづれの文もその先を讀みたしと思ふものばかりなり。

西國への旅

十森 明子

去年の秋西國の光市に友を訪ぬ。町はその名の如く、碧落一天雲もなし。濱邊には松がゆるやかに枝を伸し、寄せては反す波音靜かなり。夕暮近く、高臺の宿より眼下の海を眺む。空は茜に染まり、島々は影を深めつゝ室積の海暮れゆかむとす。

津田梅子書翰

中島 智子

四月より文語の魅力教室に入りたり。明治の著名智識人達の文章は、難解・難讀の箇所

多々あれども原文を學ぶ機會を得たること嬉し。全員にて朗讀するも樂し。

津田梅子書翰は梅子がアメリカ留學先より母へ近況を知らせしものなり。九歳にして親元を離れ、異國にて學ぶとは感服の至りなり。

梅檀は双葉より香しとは梅子のことと覺えたり。候文を多用するは珍しく、面白く讀みたり。

無神無靈魂論

尾形 松壽

内村鑑三の「無神無靈魂論」を讀み、幾多の收穫ありき。文中「神の存在を證明せよとて吾人に迫る人多し。嗚呼吾人はこれを證明し能はざるなり」とありしが、今日その證明可能なり。宇宙物理學によれば「百三十七億年前に宇宙が、四十六億年前に太陽系が、更に三十八億年前に地球上に生命が誕生、やがて人として生息せり」と。これぞ神の存在を立證する所以なる。宇宙物理學の發達により創造神の證明容易になりき。